

戸隠山

江崎本「遠キ諷組」にのみ見える近世調の曲。『古典文庫』第三七五冊より。

戸隠山 六 4

信濃の国の住人、望月某は、「とがくし山にきじん（鬼神）住（み）。ゆきゝの人をなやますよし」との鎌倉からの早打ちによつて、「太刀雄の明神の神力をたのみ」、供の者も連れずに山に入る。

山風激しく黒雲も群立つが、もとより剛の者であるので戸隠山に到り、事情を探ろうとすれば不思議や万木震動し、稲妻四方に閃いて恐ろしい限り。現れ出でた鬼神は「この山にすんでばんみんなをなやます。風き（鬼）といふはわが事なり」との名乗り。

望月が、これまでの悪事は逃れることはできないと打ちかかれれば、鬼神は姿を現し、悪風を吹きかけ山河を動かしてその恐ろしいこと。

望月、すこしも騒がず、うち物を引き寄せて飛びかかり、
はたと打てば、鬼神は微塵になさんとぐいと搦むのを、す
かさずその太腹をはたと打てば、さしも猛々しい鬼神も勢
いを失って、ひるむ所をつゞけさまに、ずだずだに斬り離
し、望月は「ふるさとへぞ、かへりけり」